

## 『ゆけむり史学』の刊行によせて

田村 憲美

文学研究科歴史学専攻に所属する学生の皆さんが、自主的、主体的に運営する「ゆけむり史学会」こと院生研究報告会も、また一年の歴史を加え、今年もその報告誌を刊行する運びとなったのは、ほんとうに喜ばしいことだ。

歴史学研究者の仕事は、歴史を研究すること、それはそうだ。もうずいぶん以前、別府に来るまえのことになるけれども、黒田日出男さん（日本中世史・近世史の研究でよく知られた方）とお話ししていたときに、「結局、歴史学者は文筆業だからな」とおっしゃったことがある。どういう話題の流れであったか、もうよく覚えてはいないが、印象にのこる言葉だったのは間違いない。

歴史学が科学か、文学か、という問いかけは古いものである。それについては、歴史学は、すくなくとも社会学や経済学がときどき僭称する程度には科学だと、私は信じているし、哲学や思想の著作がたまさかそうである程度には文学だとも思う。

黒田さんのこの台詞は、そういう問題ではないし、また、「研究内容よりも結局は文章のうまさの方が重要ですか」という問題でもない。私の理解では、研究は、かならず文章に書いておかなければ、仕事が終わったことにはならない、という意味なのだ。その当時は、私は今よりもっと元気がなく、悲観的だったから、すでにたくさ

んの論文を書かれ、いくつもの著作を刊行されていた黒田さんの言葉に、すこし反発、というよりあとずさるものを感じたわけだが、それでも、研究は、かならず文章に書いておかなければ、仕事が終わったことにはならない、というのはまったくき真実だと思わないわけにはいかなかった。

研究に限らない。言い古されたことだけれども、さまざまの事象、観察の結果、思考と論理の連鎖、それにまつわる情緒を表したり、残したりする手段としての文章は、ますますその領域をひろげている。電脳の世界も、現在のところ検索の手がかりは結局、文字と数字、すなわち文章ではないか。映像の時代といっても、実際は文章が支えているわけである。

この動向のなかで、とりわけ歴史学専攻で修学した方々は、文章を書く文筆家でなくてはならないだろう。技術者や芸術家とちがって、あとに残るものは文章しかないからである。先人未知の成果を文章につづることには、もちろん大きな意味があるが、たとえ拙い作業であったとしても、文章化しておくことには大いに意味がある。泥棒を捕まえる前に、まず縄をなっておかなければならないからだ。

『ゆけむり史学』のサークルに集った人々は、このことをよく弁えられていると思う。この会誌が、歴史学専攻学生の創見と練習の場をこれからも提供し続けることを期待し、またその文章を読むことを楽しみにしているのは、私ひとりではない。